Museum News
Planning Office

絵：柳田 基

2009
展覧会/講演会/研究会

展覧会

復元 江戸時代のきもの
–いまとむかしの職人技–
2009.5.19（火）▶7.15（水）
時計台２階展示室

原野コレクションII
EX LIBRIS（蔵書票）
–夢二から現代作家まで–
2009.10.19（月）▶12.18（金）
時計台２階展示室

講演会

きもの職人こぼれ話
矢野俊昭氏　染技連文化財修理所所長
2009.6.20（土）13:30▶15:00
西宮上ケ原キャンパス大学図書館ホール

型染の魅力について
–実演とともに–
松原秀子氏　型染作家
2009.11.1（日）13:00▶15:00
関西学院会館「翼の間」

公開研究会

–実物とデジタル画像による文化財考察–
第１回
高精細画像を用いて「唐時代銀器」の秘密をさぐる
山中理氏　白鶴美術館学芸課長
2009.9.20（日）14:00▶15:30
会場：白鶴美術館

第２回
高精細画像で見る和鏡
川見典久氏　黒川古文化研究所研究員
2009.11.14（土）13:30▶15:00
会場：黒川古文化研究所

創立125周年（2014年）をめざして

時計台を大学博物館へ

関学がめざす博物館

関西学院は2014年に創立125周年を迎えます。これを記念して、関学のシンボルである時計台を大学博物館として開館する計画が進んでいます。

125年に及ばんとする歴史のなかで、関西学院は多彩な研究・教育の成果を生んできました。知の探求の場である大学では、高度な研究がなされています。しかし、大学の研究は、ともすれば難解でわかりづらいものと受け取られがちです。大学博物館は、関学で行われている多彩な研究・教育の成果や蓄積された資料を学生はもちろん、同窓や市民の皆さまに広くわかりやすく公開する開かれた博物館でありたいと考えています。

博物館の重要な仕事は、さまざまな視点から人とモノ(展示資料)との関係を探り、科学や文化などの多様な価値を見いだせるように情報を発信することです。近年、博物館の概念も大きく変りました。貴重な資料を展示・保管する従来の博物館から、実物に限定されないレプリカや映像、グラフィックなどを活用してわかりやすい展示演出がなされるようになりました。

関学の大学博物館では、近年著しく進展したデジタル技術を応用して、従来の実物展示を補完する新たな展示方法を導入し、人とモノが出会い、知と感性が融合する展示空間を提供します。また、学内にとどまらず、近隣の美術館や博物館と連携し、常に新たな情報を取り入れ、豊かな展示をめざします。

学芸員を育てる

博物館は単なる展示施設ではありません。博物館活動の基本は、展示資料の調査と研究にあります。それを担うのが学芸員であり、学芸員には優れた研究能力と魅力のある展示を行える資質が求められます。

本学では、1962年（昭和37）に博物館学芸員資格取得のための課程が設置され、以来、多数の有資格者が卒業し、現場で活躍する卒業生もいます。近年でも毎年60～70人の有資格者が卒業しています。

しかし、博物館の現場では職能の専門化が進み、学芸員により高度な能力が求められています。これに対して、大学では学芸員資格取得のための科目の充実を図り、有能な学芸員有資格者を育てなければなりません。その拠点として大学博物館が博物館実習など体験学習の場として教育的に機能すると同時に、最前線の博物館情報を提供します。

博物館相当施設として、2014年に開館

関学の大学博物館がさまざまな事業を行っていくにあたっては、博物館法で定められた博物館相当施設として認可を得ることが望まれます。この認可を得るためには、展示室や収蔵庫などの施設はもちろん、収蔵品の整理や展覧会の実施など諸要件を満たさなければなりません。

博物館開設準備室では、昨年12月に「原野コレクションⅠ　本に貼られた版画–蔵書票の美–」展を開催したのを皮切りに、本年度は春・秋の展覧会とそれにともなう講演会、また近隣の美術館と連携した公開研究会を実施します。このように博物館活動の実績をつみあげ、2014年に大学博物館が博物館相当施設として開館できるように活動しています。

（博物館開設準備室長　河上繁樹）

展覧会報告

復元 江戸時代のきもの

–いまとむかしの職人技–

京都のきもの職人がむかしの職人技に挑戦し、江戸時代の小袖を見事に復元しました。日本が誇る「きもの」、その美と技に迫りました。

2009.5.25（月）▶7.15（水）※
10:00〜16:30（日曜休館）
関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス
時計台２階展示室
入場者数　　1646人
記念講演会参加者　92人
※新型インフルエンザの影響により5.19〜5.23まで休館しました

研究成果を展覧会に

江戸時代の小袖を復元

「きもの」は、日本の風土に育まれた伝統的な衣服です。そこには芸術性の高い意匠や色彩、すべてを手作業で作りあげる職人の優れた技など、高い文化的価値を見いだすことができます。しかし、このような伝統は近代化のなかで失われていきました。

関西学院大学大学院文学研究科は、未来へ伝えてゆくべき日本の伝統文化を保存するためのプロジェクトとして、2003〜2007年度の5年間にわたり「江戸時代の小袖に関する復元的研究」を行いました。研究では、大学と京都で活動するきもの職人グループ「染技連」との共同研究により、江戸時代の染織技法をもとに４領の小袖を復元しました。使う材料や道具、施す技法を吟味し、できるかぎり当時の方法で小袖を制作しました。このなかには現在では途絶えてしまった染織技法もあり、復元は江戸時代の職人技に対する現代の職人の挑戦でもありました。

いまとむかしの職人技

時計台が江戸時代にタイムスリップ

本展では、復元された４領の小袖とともに、復元作業の様子を写した写真パネルを展示して、復元がどのようになされたかが理解できるようにしました。そして、現代の職人が復元している写真の横には、いまとむかしの職人の仕事がわかるように江戸時代の職人の絵を配置し、復元に用いた刷毛や筆、染料などの道具や材料も参考出品しました。

また、復元された小袖と比較できるように江戸時代に作られた小袖裂（きれ）をあわせて展示しました。古色を帯びた小袖裂からは、江戸時代の職人技がうかがえるとともに、当時の人びとの美意識が伝わってきます。復元小袖や小袖裂が展示された会場は、

まるで江戸時代にタイムスリップしたかのような雰囲気を醸し出していました。

記念講演会

きもの職人こぼれ話

会期中の6月20日（土）には、復元に携わった職人を代表して染技連文化財修理所所長の矢野俊昭氏に復元時の苦労話などをお話しいただきました。

復元用の生地を織るために蚕を愛媛県にまで探しに行ったり、小袖に入れる真綿はもはや滋賀と福島でしか生産されていないとか、藍染めの藍蝋も良質なものが少なくなったなど、復元に用いる材料や道具が次第に入手困難になっていること、伝統的な技術も伝承者が激減し、途絶の危機に面している状況が語られました。

日本が誇る「きもの」、その美と技を見つめ直し、日本文化の伝統とその保護を考える展覧会でした。

観覧者の声

アンケートより

復元品の数々に驚き、集められた小袖にも圧倒されました。出来事の年表もより一層の興味をそそるものになり、復元工程のパネルも見やすく楽しかったです。期間中に知人を誘い、再度拝見したいと存じます。（男性　60歳以上）

小規模だが丁寧。地域に開かれた大学を歓迎します。
（男性　60歳以上）

関学がこのようなものをお持ちなのに驚いた。復元と現物の比較等面白かった。今後も興味深いものがあれば見てみたいです。
（女性　60歳以上）

４領の小袖に古裂が8点と多くはないが、年表や解説がゆきとどいて充分に楽しめる展示でした。復元工程が写真で示されており、作品で確認しながら見ることができた。
（卒業生　女性　60歳以上）

かつての図書館の内部がこのような展示場になっており、何十年ぶりの来館に驚かされた。今後も古き良き伝統のあるものの展示があれば訪れてみたい。（卒業生　女性　60歳以上）

関学の中にこんな場所があるなんて素敵でした。触れられるくらい近くに展示品があり、ケースに入ってない展示品めっちゃ新鮮でした。（関学生　女性　20歳代）

他の学内博物館の規模を知らないので、こういうものなのかもしれないのですが、展示物が少なく感じてしまいます。
（関学生　女性　20歳代）

初めて見る分、関心、感心するものがあった。学内のスペースにこういうのがあるのは何となく嬉しい。
（関学生　男性　20歳代）

復元品が身近で見やすく、とてもよかったですが、歴史的専門用語がいくつかわかりにくかったです。また今回のような日本の匠シリーズが見てみたいです。（関学生　女性　10歳代）

こぢんまりとした会場で、見学しやすかった。順々に説明書きがあり、VTRもあったため非常にわかりやすかった。
（関学生　女性　10歳代）

江戸時代の日本人は偉大だったんですね。展示スペースが広すぎず狭すぎずちょうど良い。今後も訪れたいと思います（何度も）。これからもがんばってください。
（社会人　女性　30歳代）

展示作品の作業工程が詳しく説明してありわかりやすかった。他に、年表があり時代に合わせて展示作品を拝見することができた。案内してくださった学生さんの対応がとても丁寧でした。
（女性　30歳代）

綺麗な関学に入って、展覧会を見られることが何より嬉しい。多くの工程と人の手を経て完成するため着物の値が高いのは当たり前だと思った。持っている着物を大切にし、また機会を作り着たいと思った。（会社員　女性　40歳代）

いつも見ている時計台の中に入ることができ，感激しました。今回の着物は着るために作られたものではないので実際に着ていた人のイメージが少ししにくかったが大変興味深かった。
（学院関係者　女性　40歳代）

こぢんまりとして、ゆっくり見学することができてよかった。当時の絵と現代の作業の様子が上下で見ることができ、良かった。（中等部保護者　女性　50歳代）

展示の着物が間近で見られたので細部の様子がよくわかりました。失われつつある着物の技を用いての復元は大変意義のあることだと思います。（学生保護者　女性　60歳以上）

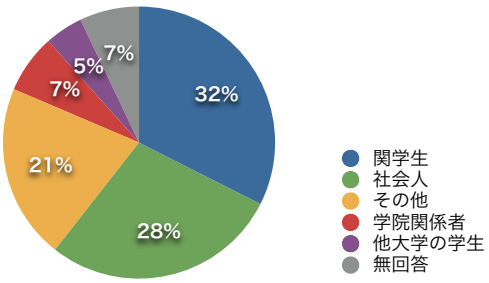
もっともっと学生向けに宣伝してください。毎日通学しているのに今日初めて知りました。来れてよかったです。2014年博物館開館楽しみにしています。（関学生　女性　20歳代）

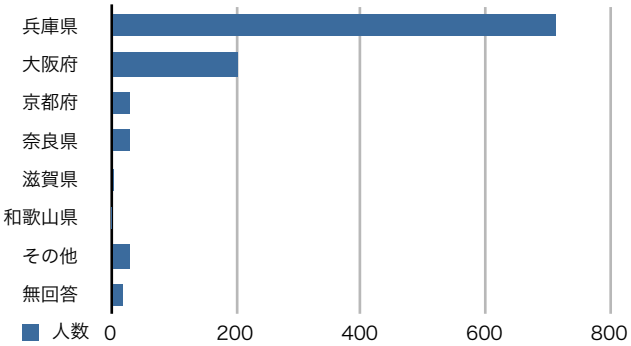
復元 江戸時代のきもの展 来場者

アンケート統計

アンケート回答者数　1,017人
アンケート回収率　　61.8%

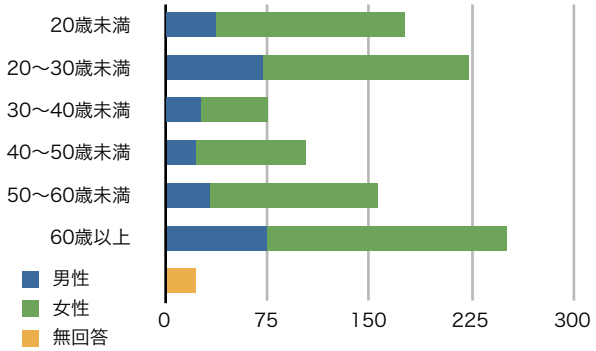
アンケート回答者内訳	
職業	人数
関学生	330
社会人	286
その他	212
学院関係者	71
他大学の学生	46
無回答	72



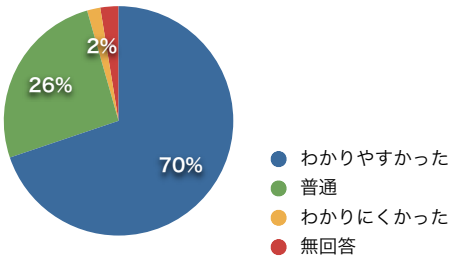


府県別来場者	
府県	人数
兵庫県	711
大阪府	201
京都府	28
奈良県	28
滋賀県	3
和歌山県	1
その他	28
無回答	17

年齢・男女別			
	男性	女性	無回答
20歳未満	37	139	
20～30歳未満	71	152	
30～40歳未満	26	49	
40～50歳未満	22	81	
50～60歳未満	32	124	
60歳以上	74	177	
			22



展示はわかりやすかったか？	
わかりやすかった	710
普通	262
わかりにくかった	19
無回答	26



これからの催し

展覧会

原野コレクションⅡ

EX LIBRIS（蔵書票）
–夢二から現代作家まで–

2009.10.19（月）▶12.18（金）

時計台２階展示室〈入場無料〉

国内でも有数の蔵書票コレクションとして知られる原野コレクションから、今回は日本の蔵書票の歴史を追いながら、日本ならではの蔵書票を中心に展示します。「紙の宝石」と呼ばれる蔵書票の美をお楽しみ下さい。

講演会

型染の魅力について
–実演とともに–

松原秀子氏　型染作家

2009.11.1（日）13:00▶15:00

関西学院会館「翼の間」〈入場無料〉

蔵書票作家で型染版画家の松原秀子さんを迎えて、型染の実演とともにその魅力や蔵書票にまつわるお話をしていただきます。松原秀子さんの愛らしい版画が摺り上がる瞬間をご覧下さい。

公開研究会

第２回
高精細画像で見る和鏡

川見典久氏　黒川古文化研究所研究員

2009.11.14（土）13:30▶15:00

会場：黒川古文化研究所

実物の和鏡を見学するとともに、高精細画像を使って和鏡の拡大像や類似作品の比較画像を写しながらミクロの世界に迫ります。そこから見えてくるものは？

博物館開設準備室通信　第１号
MUSEUM PLANNING OFFICE NEWS No.1
2009.10.1

関西学院大学博物館開設準備室
〒662-8501
西宮市上ケ原一番町1-155
TEL 0798-54-6054　FAX 0798-54-6066